

平成29年度第2回
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
評価部会 議事録要旨

平成30年1月31日（水）

午後 2 時00分開会

富岡文化施設担当課長：それでは、これから始めさせていただきます。

改めまして、本日は大変お忙しい中、皆様御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

ただいまから「平成29年度第2回東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部の文化施設担当課長の富岡と申します。本日は司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本日御出席いただきました委員の皆様を紹介させていただきます。

私の向かって左側から紹介させていただきます。

まずは蔵屋美香委員でございます。

佐谷周吾委員でございます。

白石正美委員でございます。

前山裕司委員でございます。

南雄介委員でございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

続いて、事務局の職員を紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の馬神でございます。

同じく現代美術館事業推進課長の加藤でございます。

同じく現代美術館事業係長の牟田でございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

続いて、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず、会議次第がございまして、次に1から5までの資料と評価表がついてございます。

資料1、美術資料収集方針でございます。

資料2、今回の収集候補作品一覧表でございます。

資料3、作家・作品説明書でございます。

資料4、現代美術館収蔵委員会設置要綱でございます。

資料5、評価部会委員名簿でございます。

最後に、評価部会評価表、A3サイズのもので2枚ございます。両方とも両面刷りになっているものでございます。

皆様、大丈夫でしょうか。不足はございませんでしょうか。

本日配付の資料につきましては、後ほど回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

なお、評価対象資料の価格評価に関します議事についてですが、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱の第11によりまして、非公開となります。

当部会の議事録につきましては、同要綱第11の第2項の定めに従いまして、作品資料収

集決定の後に公開を予定してございます。公開に当たりまして、委員の皆様には、個人情報など公開に差しさわりのある内容がないかどうか、追って確認させていただきたいと思っております。

それでは、議事に入ります。

本日審議いたします作品の説明をお願いいたします。

馬神副館長：本日、審議をお願いする作品でございますけれども、購入が10件、寄贈が51件となっております。これら作品の収集につきましては、午前中のコレクション部会で承認をされているところでございます。

作品の詳細につきましては、事業推進課長の加藤より御説明申し上げます。

加藤事業推進課長：では、御説明させていただきます。

御説明に当たりまして、お手元の資料2が一覧表になっております。そして、資料3が個別の作品につきましての説明をさせていただきます作家・作品説明書というものがございます。主にこちらの作家・作品説明書をごらんいただきながら、お聞きいただけますとありがたいです。

まず、ナンバー1、購入、ソピアップ・ピッチ、《樹木園》という作品でございます。

このソピアップ・ピッチは、1971年、カンボジアに生まれた作家でございます。一時期、家族で難民キャンプに逃れておりましたが、1984年にアメリカに渡りまして、アメリカで美術教育を受けております。そして、2002年の末にはカンボジアに戻り、現在もカンボジアで作家活動を続けております。

このソピアップ・ピッチの作品「樹木園」は、2012年から始められた「レリーフ・シリーズ」に連なる作品となっております。竹や藤といった自然の素材でつくられておりまして、ローカリティーと近代的な抽象性との結びつきを示す作品として、今回収蔵を検討したいと考えているものでございます。

これまで当館では、東南アジア、または東アジアも含めまして、作家の収集を進めてまいりました。その一連の作品としてだけではなく、当館の所蔵するほかの作品、ほかの地域の絵画、彫刻に対しても多角的な視点を投げかけ、新たな関係を結ぶことが期待できる作品として、収集を考えたいと思っております。

ナンバー2、購入、こちらも同じくソピアップ・ピッチの《苔の筋》という作品でございます。こちらも同じく「レリーフ・シリーズ」につながる作品ですが、この前の作品「樹木園」に比べまして、色彩を伴う作品となっております。

ナンバー3、同じくソピアップ・ピッチの《月長石》という作品になります。こちらは立体の作品になります。

ナンバー4、加藤泉の一連の作品となります。

加藤泉は、1969年、島根県の生まれでございます。特異な人物像の作品で知られ、近年、海外での評価も高く、当館でも既に1点の絵画作品を収蔵しております。今回の収蔵に当たりましては、ソフトビニールを使用しました立体作品を4点収集したいと考えており

ます。そのうちの1点が、このナンバー4、そして次のページのナンバー5、ナンバー6、ナンバー7の4点になります。

これらの彩色したソフトビニール作品は、一つの型でつくられておまして、それを着色し、変形させていくということで、型抜きをしたものではございますが、それぞれが一点物の作品となっているものでございます。

ナンバー8、《折り紙モール》、末永史尚の作品でございます。

末永史尚は1974年、山口県生まれでございまして、前回の収集のときもお話をさせていただいたかと思いますが、1970年代前後に生まれた作家の絵画作品を中心として、引き続き集中して収集を進めてまいりたいと思っているものの一環でございます。

こちらの作品は、折り紙を短冊上に切り分けて輪をつくって、交互につなげる飾りモールをモチーフにした作品でございまして、今回資料に添付しております作品は三角形の形での展示になっておりますが、作品自体は会場に合わせて、この形状は可変というものでございます。ですので、当館での展示の際には、また別の形での展示ということも想定できるものになっております。

ナンバー9、五月女哲平、《He, She, You and Me》という作品でございます。

五月女哲平は、1980年、栃木県に生まれた作家でございます。今回の作品はナンバー9、ナンバー10と、合わせて2点がございます。この作品は、そちらにもう既にございますとおり、モノクロームの作品ではございますが、その下には非常に鮮やかな色彩があり、それをまさに絵画を通して見るという経験の複数性というものを問う作家の代表作として、今回の収集を考えたいと思っているものでございます。

ナンバー10、これも同じく五月女哲平の《White, Black, Colors》という作品になります。

これは6ピースのものを組み合わせて1面の画面にしておりますもので、2010年代の日本の絵画の一つの達成地点として収集にふさわしいのではないかと考え、今回御検討をお願いしているところでございます。

ここまでが、購入作品でございます。

ナンバー11からが、寄贈の作品となります。

ナンバー11、オノサト・トシノブの《二つのかぼちゃ》という作品でございまして、こちらは、オノサト・トシノブの、1940年、戦前の初期の作品となりまして、その点でも非常に希少性の高いものと考えております。

当館では、これまで既にオノサトの作品を収蔵しておまして、100点以上のコレクションとなっている中で、初期から晩年に至る主要な作品が、ほぼこれで網羅されてくることになると考えているものでございます。

ナンバー12、同じくオノサト・トシノブの《人々》という作品になります。こちら、いわゆるオノサトの「ベタ丸」と言われるシリーズへと至る前のさまざまなアプローチの跡を見せる作品となっております。

ナンバー13、《風体 金魚 1954年》という作品でございます。これもその前の《人々》

と同じく「ベタ丸」の前のオノサトの試行の跡がうかがえる作品でございます。

ナンバー14、オノサト・トシノブの《作品》となっております。これは1963年の作品で、いわゆるオノサトの典型的な画風が確立した時期の作品となっております。

ナンバー15、《円の動き》でございます。これはカンヴァスを四角の面ではなくて、ひし形で展示する形になっているものでございまして、さまざまなオノサトの制作への実験的な手法というものが見てとれるものでございます。

ナンバー16、オノサト・トシノブですが、こちらからが水彩の作品となります。こちらのタイトルは残念ながら不詳ということになりますが、1959年の作品でございます。55年ごろからの「ベタ丸」と呼ばれる円と直線による画面分割の作品を描くようになってからのものでございますけれども、水彩でありますため、作家の手の動きといいますか、そういった動きが色彩の跡というものも同時に見てとれるもので、大変興味深い作品の一つとなっております。

ナンバー17、こちらも水彩、《朱の分割円》という作品でございます。同じく1960年代の作品でございます。

ナンバー18、同じくオノサト・トシノブの1963年の水彩の《作品》となります。

ナンバー19、《円65-B》、こちらも1964年の水彩作品でございます。

ナンバー20から61、こちらが中原實の作品でございます。

中原實は、1893年、東京麹町に生まれまして、歯科医師を目指してアメリカに留学をし、その後、そのまま日本に戻ることなくフランスに渡って、その10年代末から20年代にかけてのヨーロッパでのさまざまな先進的な芸術に直接触れて日本に帰ってくることとなります。そして、歯科医師としての職につくと同時に第10回の二科展に入選し、画家としても非常に注目を集める、そういった活動を始めることとなります。その後、「アクション」「三科」といった日本の戦前の新興美術運動の最先端で活躍をしていくこととなります。戦後も引き続き二科展に出品し、生涯歯科医師、そして、画家としての活動を行っていた作家でございます。

具体的な作品は、点数が多うございますことから、次ページから4点ずつまとめております。

まずナンバー20、《炭坑》、1926年の水彩作品になります。こちらは今回の御寄贈の中で、唯一の水彩作品となっております。

ナンバー21、《モジリアニの美しき家婦》、1923年、これ以降が全て油彩になります。こちらが帰国してから初めて入選しました第10回の二科展の出品作となります。

「アクション」という前衛グループに出品した《ヴィナスの誕生》、20年代の《海水浴》でございます。

次のページ、ナンバー24《ノスタルジア》でございます。

ナンバー25《乾坤》、ナンバー26《アトミック No.2》、この《乾坤》と《アトミック No.2》、実を言いますとこれは3点の連作になっているのですが、連作のうちのもう一点

は板橋区立美術館に収蔵されております。その連作のうちの2点となります。

そして、1929年の《月光と肖像》もしくは《星と女性》というタイトルにもなっておりますが、ナンバー27です。

ナンバー28《銀河の沐浴》でございます。

ナンバー29《無題》、これは中原が留学時代に知り合い、結婚した海外の外国人女性の奥様の姿の肖像と言われているものでございます。

ナンバー30《猫の子》でございます。

ナンバー31《昼の星雨》、ここからが1930年代の作品となります。

ナンバー32《遠い方へ（FAR-AWAY）》、ナンバー33《レモンのラビリンス》、ナンバー34《白像》、ナンバー35《西洋少女》、ナンバー36《ねむれる人形》、ナンバー37《心の噴火口》、ナンバー38《脚部矯奢》でございます。

ナンバー39《石原博士像》、これは中原が知人の同じく医学博士を肖像画として描いたものでございます。

ナンバー40、1938年の《魚の説》、ナンバー41、1938年の《復活》です。

ナンバー42から、戦後の作品となります。《杉の子》、そして、ナンバー43が《自然の中性》、ナンバー44が《無題（スポーツ）》、ナンバー45《兜の昇天》、ナンバー46《顔》、ナンバー47《多感》、ナンバー48《丘》でございます。

ナンバー49《神々の数学》、これ以降が50年代の作品となります。

ナンバー50《コック》、ナンバー51《石》、ナンバー52《柳川》、ナンバー53《二村領二郎博士像》でございます。

ナンバー54《レチ子像》、これは中原實の娘さんの肖像画になります。

ナンバー55《入江》でございます。

次のページ、ナンバー56《花咲半島》、ナンバー57《根室近く》でございます。

ナンバー58《リザの人形振り》、これももう一人のお嬢さんの肖像画として描かれています。

ナンバー59、これは残念ながら制作年は不詳ではございますが、《外套》でございます。

ナンバー60、こちらが1961年の《揖斐川石》でございます。この作品が今回御寄贈を受けます中で、中原にとっての最も晩年の作品となります。

ナンバー61、こちらが大変残念ながら作品名が不詳でございますが、今後調査を進めつつ、1930年代ぐらいまでさかのぼる可能性があるのかと考えてはおりますが、まだ制作年も不詳ということになります。

以上が、寄贈61点全てになります。

以上でございます。

富岡文化施設担当課長：それでは、これから作品の実見をしていただきたいと思いますので、皆様、御移動のほう、よろしく願いいたします。

（委員離席）

(作品検分)

(委員着席)

富岡文化施設担当課長：何か御質問とかはございますか。大丈夫ですか。

佐谷委員：ボールペンで書くのですか。

富岡文化施設担当課長：最終的にはボールペンで書いていただきます。

加藤事業推進課長：価格を御記入いただきますに際しまして、同一作家の取引事例を作家・作品説明書の右中段に記載しておりますので、そちらを御参照いただきながら御記入いただければと思っております。

富岡文化施設担当課長：評価表は税込みで記載をいただければと思います。2枚ございまして、大変お手数なのですけれども、2枚とも御署名をいただきたいと思います。最終的には、皆様の評価額を集めまして、最高価格と最低価格を除いて、残りの価格の平均値が最終的な評価額となります。

御記入いただいた方から、係員にお渡しいただきまして、確認終了後は御退席いただいて構いません。確認完了をもって委員会も終了ということになります。

それから、白石委員が本日の委員会で任期満了ということで、通算4期8年にわたりまして、大変御協力をいただきまして、本当にどうもありがとうございます。改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

それでは、記入をお願いいたします。

資料のほうは、お帰りのとき、机上に残したままにいただければと思いますので、よろしくをお願いいたします。

(評価書記入)

(事務局評価書確認)

(委員退出)

午後3時40分閉会

以上